

芸術と感情

西村清和 (國學院大學)

近年わが国でも、伝統的には知・情・意からなるとされる人間の経験や認識の全体のうちで、とりわけ知覚や感覚、感性や感情などの基本構造を解明する学としての〈美学＝感性学〉の可能性をさぐる動きはとみに高まっている。なかでも「感情」に注目してみれば、それは概念的思考や論理にうまくおさめることがむずかしいためにこれまで哲学が苦手としてきたテーマなのだが、〈美学＝感性学〉は伝統的に、たとえ主題的にではなくとも、これをさまざまな形でとりあげ論じてきた。それにはたとえば、以下のようなものあげられる。

- (1) 美的価値判断にともなう「快感情」——美的趣味判断の「規定根拠」は主観的な「快感情」であるとするカントの主張は、それ以後の近代美学にとって有力なテーゼとして受け入れられてきた。だがいわゆる「美的快」とはなにをいうのか、またそれは美的価値判断とどのような関係にあるのか。
- (2) 美的カテゴリー (美的概念) ——美的カテゴリーとは、美的判断によって対象がもつとされる特定の美的質のタイプを名指すものだが、その判定は当の対象を経験する主観の感情経験にもとづくのか、あるいはそうした主観的感情とは関わりなく、対象の属性として判定されるのか。
- (3) 作者が「表現する」感情——作品を介して感情を表現するとは、どのような事態をいうのか。またその結果、作品自体がもつとされる「感情的質」とはなにをいうのか。
- (4) 悪趣味やキッチュにおける感情の倒錯や「感情過多 (センチメンタリズム)」——「よき趣味」が課す美的規範ないし美的義務に反するかぎりでは、これはいわば「美的アクラシア (無抑制)」として倫理的に非難されるのか。信念の義務論に平行な「美的義務論」における美的当為とはどのようなものか。
- (5) 作品に描かれた人物や出来事に対する享受者の「感情的関与」——作品についての美的経験の内実は、とくべつに「美的感情」と呼ばれるようななにか特殊な感情にかかわるものか、それとも必ずしも感情をともなうわけではない経験をいうのか。しばしば享受者は登場人物に「感情移入」といわれるが、はたして享受者がもつ美的経験の内実はなにか。美的経験における共感や同情と、いわゆる「道徳感情」や「道徳情操論」とはどのようにかかわるのか。

本シンポジウムは、この「感情」という困難な哲学的テーマに対して、これをとくに芸術とのかかわりにおいてさまざまな形でとりあげてきた〈美学＝感性学〉と芸術諸学の視点から、芸術作品が着想され、作られ、経験されるという芸術行為の現場に即したあらたな切り口でアプローチすることを目指す。そしてこれによって、たとえわずかでも「感情」の原理論に対するあらたな展望が拓かれることを期待したい。